岐阜県富加町における史跡や文化財を活用した高校生と地域住民の協学による教育プログラムの開発と実践

島田崇正[1)]・益川浩一[2)]

1)岐阜県加茂郡富加町教育委員会　文化財専門官（〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田 1511）

2)岐阜大学地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸１番地１）

1. はじめに

本稿では、岐阜県富加町で実践中である史跡や文化財を活用した高校生と地域住民の協学による教育プログラムの取組について報告する。

対象地となる富加町は、奈良正倉院に現存する日本最古の戸籍「大宝二年（702）御野国加毛郡半布里戸籍」の故地として、約４km 四方の行政区域全体が学術的な価値を有するという非常に希有な地域であり、国史跡の前方後円墳や古代から中世の集落跡、戦国期の山城跡と城下町などの多岐にわたる歴史遺産と、たゆまぬ人間活動が生み出した多様な文化財が、町の豊かさと安定性を示している。令和元年度の文化財保護法の改正では、少子高齢社会の中で文化財の持続的な保護を図るためには地域総掛かりで取り組む必要性が強調され、文化財の「活用」に重点が置かれた。この活用をめぐっては主として観光的活用を中心に議論がなされ、当町においても観光の面からの文化財への期待が高まっている。しかし、地域振興を安易に観光に結びつけるのではなく、地域に住む人々が足元を見つめ直し、郷土と心的に繋がる材料とする視点も大切にするべきである。そこで「ふるさと教育」への活用を基礎に地域振興に繋げる視点を重視する必要がある。

さて、町の総合施策の中での位置づけを確認しておくと、「富加町第５次総合計画」において提示された６つの基本理念のうち、「豊かな心と文化を育むまちづくり」を具体化する施策として文化財の保護と活用が盛り込まれ、「魅力と活力あるまちづくり」の中で歴史を観光資源にも活用する方向性が示されている。そして、こうした施策を実現する上で「協働で自立したまちづくり」の推進が掲げられており、複雑化・多様化する課題解決に向けて地域住民やＮＰＯとの協働での取り組みの重要性が強調されている。

以上、当町における文化財の保護や活用事業は、「ふるさと教育」への寄与を基礎にしながら、観光へのアプローチも視野に入れながら、地域住民だけでなく多様な団体を巻き込みながら、協働で実践していく姿勢が求められていると考えられる。この観点を柱に据えて、当町で有効な史跡や文化財を活用した教育プログラムについて考究する。

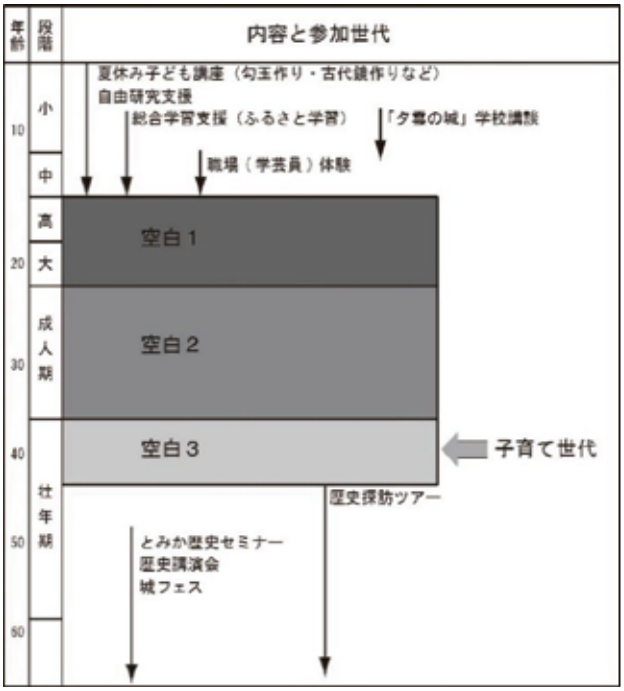
2. 対象や方向性の検討

2-1. ターゲットとする年代の検討

当町の歴史系事業は富加町郷土資料館を中心に、郷土の歴史や文化財を活用した講座・講演会などが開催され、普及活用という面で地域住民から一定の評価を得ているものの、単発の「イベント」で終わっている点や、参加者層が広がらない点が課題である。

また、文化遺産の活用に住民の参画を図るため、すでに「半布里文化遺産活用協議会」を発足している。しかし積極的な活動への意識は高いものの、具体的な活動の道筋が明確になっていない点が課題となっており、当協議会の活動と教育プログラムを連動させることが重要であると考えられる。

次にターゲットとする世代を考慮しながら、どのように事業を展開すべきかを考究する。それにあたり、まず当町の歴史系事業への参加世代（令和元年度）を検討した（図表１）。参加者の世代は上下に分かれており、中間に大きな空白世代が生まれている。



図表１　令和元年度の歴史講座の内容と参加世代の傾向

この空白世代は、生活様相を軸に３つに区分して考え、それぞれにどのようにアプローチするかを考えてみた。

まず空白２（成人期）、３（子育て世代）については、地域づくりの観点からは是非とも取り込みたい世代であるが、この世代をターゲットの軸にするには、根本的な方法論の転換が必要であり、事業の趣旨や全体のバランスを崩す恐れがあった。むしろ、当該世代へのアプローチは、教育プログラムとしてよりも、情報提供や周知の方法に課題がある可能性も考えられる。さらに空白３は子育て前半期であり、新たな教育プログラムを展開しなくても既存の子ども講座企画のブラッシュアップや、親子参加を促すなど、子どもを通じて参加を促すことも可能である。

一方で、空白１（高校生・大学生）については、今までターゲットとしてこなかった世代であるが、学生層である点を考えれば、学校教育という場面を介することで繋がりをつくることは難しくない。高校生以上になれば社会性も高くなり、難易度の高い課題にも適切に取り組むことができる。また、これから地域の担い手となっていく世代であり、ぜひとも地域の歴史からふるさとの魅力を学んで欲しい世代である。

以上の考察から、本実践では半布里文化遺産活用協議会を活用し、今までターゲットとして視野に入れてこなかった空白１の世代を対象とし、史跡や文化財を活かしたふるさと教育を主題とした教育プログラムを提示することとする。

2-2. 他市町村事例の検討

次に、学生層や地域の文化財保護活用団体をターゲットとした県内自治体事例を検討しておく。

(1) 岐阜県本巣市教育委員会生涯学習課「ふるさと学習ロマンプロジェクト」の取り組み

国史跡「船来山古墳群」を素材とした地域づくりを意図したプロジェクトで、複数回のセミナーを中心に史跡ボランティア養成講座や子ども学芸員の養成講座などを連動させて、史跡に関わる人材づくりの機会を創出している。当該プロジェクトの中で、岐阜農林高校環境科学科の卒業研究実習として古墳群の測量調査を実施し、この活動に市内中学校の職場体験や、子ども学芸員の活動、ボランティアとの交流を組み込んでいる。そして、アウトプットの場として「ふるさと学習ロマンプロジェクト」のセミナーの中で発表の場を設けている[1)]。

(2) 岐阜県飛騨市教育委員会文化振興課の取り組み

吉城高校・斐太高校の生徒の地域研究に市の学芸員が関わり、協働で地域史を研究し、その成果を発表する場として飛騨の歴史研究最前線「高校生が語る！」を企画している。高校生と地域の研究者や学芸員とのパネルディスカッションなども実施している。また、興味深い取り組みとして、新型コロナウイルス感染症予防対策の取り組みとして、オンライン企画による「おうちで飛騨の縄文めぐり」と題したみやがわ考古博物館のバックヤードツアーが開催された。約 200 名の参加があり、東京など遠方からの参加もあり、新しいイベントのあり方を提示した[2)]。

(3) 岐阜県可児市文化振興課の取り組み

市内に点在する山城の保存会を中心にした「可児市山城連絡協議会」を組織し、金山城など城の保全、戦国ミュージアム館の管理を中心に、城跡の学習を通して地域の歴史遺産の活用を図り、ガイド事業や城跡関係の刊行物の発行などで地域に成果を還元している[3)]。

以上の３自治体の事例から、次の参考とすべき重要なポイントを見出すことができる。

①学びの成果発表の場や、成果を示すもの、達成度を示すものが用意されている。

②学びのみで完結せず、学びを次の活動に活かす場が用意されている。

③立場の違う人やグループが、学びを通じてつながる仕組みが用意されている。

そして若干主旨からは逸れるが、コロナ禍による飛騨市のオンライン開催の取り組みは、今後の新型コロナウイルス感染症予防対策の中での事業のあり方について示唆を与えるものである。それだけでなく、図らずも、オンラインや動画配信の取り組みが博物館・文化財事業の可能性を広げるというメリットを提示した点は重要である。コロナ禍のような人の移動や接触が制限される場合において、活動を継続する手法やツールを用意しておく必要性が感じられる。

以上の点を教育プログラムの企画コンセプトに盛り込んでいくこととした。

3. 教育プログラムの検討

■プログラムの概要■

事業名	「とみか歴史チャンネル」プロジェクト～歴史ＰＲ動画作成を通したふるさと教育
事業の目的	他者へ紹介するという活動を通して、町の歴史遺産を見なおし、あらためて自分達が住む地域の良さを再確認し、郷土との心的な繋がりを醸成する。 また、学習を通じて地域文化や文化財の保護意識の高揚を図り、今後の担い手づくりに繋げていく。
実施主体	富加町郷土資料館
参加対象	文化遺産活用協議会・連携学校
期間・回数	9 月～翌年 3 月、6 回
学習場所	資料館研修室・町内の史跡や各種文化財の所在地
学習目標	地域の歴史を紹介した動画を作成し、一般公開する。また、ＤＶＤ等で地域の小中学校へ配布し総合的な学習の時間等で利用してもらう。
学習方法	文化遺産活用協議会員が主体として対象とする文化財等を決定し、それについての調査や学習を行う。同時に、関高校地域研究部にもその題材について学習してもらい、プログラム後半期において合同で素材の切り取り方等の詳細を決めながら動画撮影へと進める。

■プログラムの展開■

対象	文化遺産活用協議会	対象	関高校　地域研究部
学習活動	富加町の歴史の魅力をＰＲする動画を作成しよう！	学習活動	歴史ＰＲ動画作成のサポート活動
回	内　　容	回	内　　容
1	ワークショップ（今後の進め方について）	1	ワークショップ（サポート方法について）
2	学習会 1（講師：学芸員）	2	学習会（講師：学芸員）
3	学習会 2（講師：学芸員）	3	ワークショップ（ＰＲ方法検討）
4	事　前　合　同　検　討　会		
5	Ｐ　Ｒ　動　画　撮　影		
6	動画の確認と振り返り・今後への展望についての検討		

成果の公開	ＤＶＤ化し学校等へ配布。（教育利用を図る）
	ＹｏｕＴｕｂｅにて一般公開 → 広報・記者発表。（まちのＰＲに繋げる）
	動画発表会の開催。（制作者による文化財の見所や制作秘話なども盛り込む）

↓

地域学校協働活動への展開 ～人材と材料の提供～

図表２　教育プログラム構想図

ここまでの課題や対象の分析および参考事例の検討を踏まえながら、当町における史跡や文化財を活用した教育プログラムの構想を構築した。

まず対象の中心には「半布里文化遺産活用協議会」を据えることとした。当活用協議会は平成28 年度に設立し、富加町郷土資料館と協働で、地域の歴史ＰＲ活動や歴史イベントのサポート活動を実施している。今後は歴史ガイド事業を展開していく計画であったところで、コロナ禍によって足踏み状態となってしまった。そこで、ガイド事業の代替として歴史ＰＲ動画を作成することを当面の目標に設定し、この過程に学生（今回は高校生を対象とする）との協働を導入することで、世代や立場の違うグループを繋げることとした。さらに動画の内容決定やシナリオ作成の

過程で、学芸員によるレクチャーの機会を設定して理解を深める。ねらいとしては、動画作成という明確な目標を設定することで、参加者の学習への集中度が高まり、「他者へ伝える」ことを意識することによって、学んだ事柄の再生産が促されると考えられた。つまり参加者各自の中へ「知識と経験」として蓄積されることを期待した。

作成した動画は「YouTube」で公開し、広報誌や記者発表などを通じて地域へ周知を図っていく計画とした。さらに、展開次第では動画をＤＶＤ化して学校等へ配布し、総合的な学習の時間などの学校教育現場に役立ててもらうことも期待できる。

多種多様な文化財がある当町の特徴を活かし、継続して動画を制作・公開していくことも可能である。また、協働する相手も学校だけでなく他のグループやＮＰＯでも可能であり、相手によって学習の内容や広がりが大きく展開していく可能性もある。そして、成果品を得ることで自らの活動成果を実感し､活動の足跡を確認することができる｡何よりも参加者が地域を知ることで、ふるさとへの愛着や誇りが再確認され、蓄積された知識や経験により将来的には文化財保護の担い手へと成長していくことも期待できる。そしてもうひとつ、今回協働を想定した高校生には、地域史の研究がまちのＰＲに繋がる可能性を体感し、地域振興について考える機会とすることもねらいのひとつであった。

成果品である動画の完成度にはあまり固執せず、まずは単純に完成を目指し、達成感を得ることが大切だと考えた。むしろ学ぶ楽しさや、グループで作品を作り上げる楽しさを味わう点に重点を置き、そのための雰囲気作りを重視した。

そして、学生との協働活動は他世代との貴重な交流の場でもあるので、できるだけ一緒に活動ができるように学校側（今回は部活顧問）との事前打ち合わせなど、十分な準備を行った。

4. 教育プログラムの実践

4-1. 関高校地域研究部と半布里文化遺産活用協議会との歴史遺産の合同調査と学習会

隣接市に所在する関高等学校は、「地域研究部」が多彩な活動をおこなっていた。たとえば関市内の鵜飼鵜匠の研究や、霊長類研究所とのコラボ研究など、全国コンクールで優秀賞を受賞する県内随一の活動実績を誇っている。そして加茂郡・美濃加茂市から通う生徒も年々増加しており、地域の子どもたちの参加も期待できた。

さっそく学校側へ趣旨の説明をおこなったところ、快諾を得ることができた。そこで、まずは地域研究部顧問、生徒代表、半布里文化遺産活用協議会代表に集まってもらい、先述の教育プログラム構想から今後の展開を考えるミーティングを開催した。その中で、学習会よりも共に活動することで交流を深めていこうとの意見がでたため、まず初回の令和 2 年 10 月 25 日（日）に歴史遺産の合同調査を実施した。講師は町の学芸員が担当し、実物を見学しながら学習を深めた。

その後は、それぞれに学習会を開催し、定期的に合同調査を開催した。回を重ねるごとに、活用協議会メンバーが高校生に地域の歴史を教える場面も増えてきている。

図表３　関高校地域研究部と半布里文化遺産活用協議会との合同調査の様子

4-2. YouTube での発信

歴史遺産の合同調査や学習会で学んだ後には、その内容を動画にまとめる作業を並行しておこなった。そして、文化遺産活用協議会による YouTube チャンネルを立ち上げて、まとめた動画を「発見！とみか歴史チャンネル」として発信した。

活動メンバーの個性に合わせて、動画に

図表４　YouTube チャンネル

登場して解説する役割や、シナリオを考える役割、ナレーション、編集作業などそれぞれに関わり方を模索しながら動画作成は今も継続している。令和4年度で3年目となったが、半布里文化遺産活用協議会メンバーに役割分担が生まれつつあり、こだわりも生まれている。関高校地域研究部でも、当プログラムに継続して取り組むチームが結成され、新入生を導入してくれており、とても良い循環が生まれている。

動画チャンネルの登録者数は令和4年12月28日現在で137人であり、11本の動画をアップし、2,827回視聴されている。

また、令和4年11月10日に富加町に国史跡（夕田墳墓群）が誕生した。最古級の前方後円墳を含む重要史跡として文部科学省から指定を受けた。これを受けて、半布里文化遺産活用協議会では、動画作成とともに現地ガイドも実施し活動を発展させていくこととなった。3年間の動画作成の活動で、地域の文化財や歴史への知識や、普及活動への自負が生まれており、そういった学習や経験が今後の現地ガイド活動に活かされていくのではないかと感じている。

4-3. 高校生によるオンラインイベントでの報告

コロナ禍や高校生の時間的制約で、動画撮影やYouTubeでの発信のために集まって作業することが簡単ではなかった。そこで、富加町が開催する歴史イベントで、それまでの活動を発表してもらう機会を設けた。これによって学習の目的を明確化し、アウトプットを図ることとした。

令和2年度には、オンラインイベントで開催することとしたが、これは本プログラムの構想段階で、コロナ禍に対応したあり方を模索したものを形にしたものであった（2-2. 他市町村事例の検討を参照）。

図表５　高校生の発表の様子

イベントの概要は以下の通りである。

【イベントの概要】
・イベント名　おうちde歴史イベント（YouTube配信）
・配信日時　　令和3年3月28日（日）
・内　　容　　歴史講演会、関高校地域研究部の研究発表、首長対談、歴史講談
・視聴人数　　リアルタイムでの視聴者120名
　　配信後、録画を２週間公開　300回視聴

このイベントで高校生に実践発表をしてもらったことで、２つの大きな成果があった。

ひとつは、高校生たちが学習したことをまとめただけでなく、半布里文化遺産活用協議会との交流と学習の中で感じたことを「町の魅力」と捉え、多くの人に魅力を知ってもらうためにはどうしたら良いかという「提案」を含んでいた点である。具体的には、山城跡と戦国時代の歴史に焦点を当て、自然豊かな風土と、歴史のドラマ性、現在も残る遺跡を結びつけて体感してもらうために「歴史ツアー構想」を提案してくれた。この提案は、本プログラムのその後の展開へと繋がっていくこととなった。

もうひとつは、イベントをYouTube配信したことで、録画されたものを一定期間公開することができたことである。これにより当日に見逃した人も後日見ることができ、視聴回数は300回に上った（※現在は限定公開。上記QRコードから視聴可）。これはオンラインイベントの利点であると感じた。また、高校生の保護者にもイベントを見てもらうことで、YouTube のチャンネル登録をしていただけた。高校生を介して40代の子育て世代にもアプローチができたことになり、有意義であった。

5. 活動の広がり

令和2年度から開始した当該プログラムは、動画制作と配信を中心に現在も継続している。半布里文化遺産活用協議会の活動は、シナリオ作成・音響・編集など作業分担が定着している。さらに毎月第3土曜日には、学芸員による歴史講座を受講し、学習を発展させている。

一方で、思わぬ方向への活動の展開もあった。いくつか紹介したい。

5-1. 高校生による提案「歴史ツアー構想」の実現に向けて

「おうち de 歴史イベント」において高校生が提案した「歴史ツアー構想」を実現しようという動きが展開している。半布里文化遺産活用協議会だけでなく、イベントの YouTube 配信を視聴した企業や実業家の方々から様々な協力の申し出があり、現在も検討を続けている。

令和 3 年 4 月 13 日	ツアー会社との検討会（協力：大手旅行会社）
令和 3 年 4 月 24 日	Zoom による城跡中継の実証実験
令和 3 年 6 月 20 日	木曽川の川下り中継の実証実験（協力：地域企業）
令和 3 年 7 月 10 日	山城のドローン撮影（協力：個人ドローンオペレーター）
令和 4 年 7 月 21 日	高校生によるアイデアソン（実施主体：地域企業）

こうした継続した取組が評価され、岐阜県が助成する木曽川と周辺観光を結びつけた魅力発信事業として地域企業との協働事業[4]が動きはじめている。

5-2. 関高校地域研究部による全国コンクールでの発表と優秀賞受賞

関高校地域研究部は、富加町での取り組みを「織田信長の東美濃攻略戦とその関連史跡の活用について～地域と高等学校の連携による実践報告～」と題して、日本考古学協会高校生ポスターセッション 2021 に応募し、見事に優秀賞を受賞した。半布里文化遺産活用協議会との地域史の学習と動画制作の実践、歴史イベントでの発表に向けて考えた史跡の活用方法「歴史ツアー構想」の提案など、今回の教育プログラムでの一連の過程をまとめたものであった。

当発表は、郷土史の調査や研究だけでなく、地域の人々との共同作業や、地域の魅力を発信する方法を地域の人々とともに考え、提案に結実させたことが高く評価された。町にとっても嬉しい受賞であった。

5-3. 歴史マンガ制作・活用プロジェクトへの展開

令和４年度に富加町教育委員会では郷土の偉人マンガ制作事業を実施することとなり、このプロジェクトに高校生や半布里文化遺産活用協議会に参画してもらうこととなった。

ねらいは、マンガ制作を「学びの場」としようという試みであり、本稿で取り上げた教育プログラムのスキームを利用したものである。媒体は動画だけに限定させるのではなく、変化させることで、活動そのものをリフレッシュできる。今回の活動の柱は、シナリオ作成の一部を高校生に依頼し、そのための事前調査や学習会を半布里文化遺産活用協議会と学芸員がサポートしていく形とした。本事業への参加希望者を募ったところ、地域研究部と文芸部の高校生 15 名が事業に協力してくれることが決まり、現在活動が始まっている。マンガは令和 5 年 3 月刊行である。

媒体は変化しても、スキームが確立していたことでスムーズに事業が進行している。

また、岐阜県高等学校総合文化祭の地域研究部門において、本事業の取り組みを関高校地域研究部が報告し、最優秀賞を受賞した。主な受賞理由として自治体や地域住民との継続的な取り組みが評価された。

合同の学習会

高校生を交えた編集会議

編集会議で選ばれた
マンガの表紙

図表６　歴史マンガ制作での高校生と半布里文化遺産活用協議会の協働の様子

6. おわりに～課題と総括～

従来の「ふるさと学習」といえば、郷土史講座や文化財巡りなど、参加者が受講者で終わってしまうケースが多かった。しかし近年、地方創生やまちづくりといった文脈の中で「ふるさと学習」の重要性が格段に増していることを考えると、地域課題解決型学習への転換を試みることが、地域にとって非常に有意義なものになるのではないかと考える。

そのためには参加者を、受講者から発信者へ変えていく仕掛けが必要なのではないかと考えたのが、本プログラム作成のきっかけであった。学んだことを発信するためには、学習を自分なりに再整理し、アウトプットする必要がある。この動機付けとして動画作成を導入した。動画という成果品を目標に据えることで、学習の目的が明確になり、達成感も得ることができている。

さらに発信するべきことを、メンバーや、今回の場合は世代の違う高校生と共有しなければならない。動画作成だけにとどまらない様々な意見がでる。まさに高校生からの歴史ツアー構想の提案は、予期せぬ嬉しい驚きであった。こうした共有の過程が、学習の問題意識を深めることになっている。学びをとおしての共同体験、共有体験、そして成功体験が蓄積されていく点が本プログラムの大きなメリットであり、広がりの原動力となっている。

振り返れば、高校生との協働を進めた点はとても良かった。経験の不足や視野の狭さなど、当然ではあるが大人のようにいかない部分もある。しかし、高校生であれば一定の社会性があり、課題への自主的な取り組みもできる。共同学習や体験で、足りない部分を補ってあげることで、驚くほど成長する。この補助的役割を、文化遺産活用協議会の地域の人々が担っていくのだという役割意識も芽生えつつある。高校生は、自分を取り巻く世界への関心は大人よりも高く、それに対する吸収スピードは驚くものがある。そのことを地域の人々も感じて活動の励みとなっている。人間形成の過渡期段階で、故郷を知り、その魅力を考えることは、地域資源への投資として大切なことである。彼らは将来の地域の担い手なのである。

最後に少し課題を考えておきたい。学びと活動の循環が軌道にのりつつあるが、継続していくうえで参画者の固定化や高齢化への対応は考えておく必要がある。新規参加を継続的に呼び掛けていく必要があろう。スキームを活かして、他の団体とのコラボなども積極的に呼びかけていくこともできる。ただし、事業が広がることで目的や目標が薄れてしまい、活動自体が目的化してしまうことは避けなければならない。適切な塩梅を見極めながら、少しずつリニューアルやバージョンアップを考えてコーディネートしていくのが肝要だろう。また、今後の展開として視野に入れておきたいのは、地域学校協働活動の中で活かしていくことである。当町は令和４年度に地域学校協働本部を立ち上げたばかりである。文化遺産活用協議会が、蓄積した知識や経験を学校教育現場で活用できるプログラムに転換していく必要がある。

今後も、この教育プログラムを継続・発展させて、地域住民主体の学習と活動の循環をコーディネートし、地域振興やまちづくりといった課題の解決に繋げていきたい。

註

1)船来山古墳群 HP「ふるさと学習ロマンプロジェクト」
http://www.city.motosu.lg.jp/category/2-10-5-0-0-0-0-0-0-0.html 2022.8.18 最終確認。

2)「飛騨市の文化財HP「研究最前線　高校生が語る！」2019.11.11 記事
http://hida-bunka.jp/infomation/ 2022.8.18 最終確認。

3)可児市山城連絡協議会 HP「可児市山城連絡協議会の紹介」
http://yamajiro.wixsite.com/mysite 2022.8.18 最終確認。

4)本事業は、(有)Eat&Live が環境省の国立公園・温泉地等での滞在型ツアー・ワーケーション推進事業費補助金の交付を受けて実施する。令和４年度にツアー事業の実証実験をおこない、令和５年度以降にリバーポートパーク美濃加茂を拠点として本格実施の見込みである。本事業のきっかけは、当町オンラインイベントで高校生が提案した「歴史ツアー構想」である。